



傷の声—絡まった糸をほどこうとした人の物語—

齋藤塔子 著  
 医学書院  
 2024年11月 312頁  
 本体価格 2,000円+税

「この本を読んだら、もう今までと同じ自分ではいられない」——本書の帯で宮本有紀氏が書いているとおりであった。それくらい衝撃を受け、自身の医療者としてのありようを深く見つめ直させられる書だった。本書の著者は、家族を支配し徹底的に管理する父と精神不安定な母によって、幼少期より心理的、経済的虐待が常態化していた家庭に育ち、複雑性PTSDを患っている。15歳から激しい自傷行為を繰り返し、『死にたい』と『生きたい』の壮絶な綱引き」(p.191)の毎日を生きる精神科医療ユーザーであると同時に、勉強に励んで東京大学医学部健康総合科学科で学んだ看護師でもある。そのためか本書には、現在進行形で自身の生きづらさを赤裸々に語りながらも、その根っこが何なのか見極めようと模索する俯瞰的な視点もうかがえる。その視点をもって紡ぎ出されるのは、聴き取ることのできない叫びではなく、傾ける耳に確実に届く「傷の声」、著者が伝えたいと切に願った「固有の物語をもった人」としての当事者の生きた言葉である。

評者は、同じ病棟で働く勉強熱心な看護師の一人から勧められて本書を読んだ。たて続けに2回読んだ。1回目は身体の痛み、流れる血、薬やアルコールで意識を飛ばすことによってしか逃れられないほどの心の痛みがどういふものか、つまびらかに語られている内容に圧倒され、また、著者の「壮絶な綱引き」が「死にたい」ほうの勝ちで終わってしまった(本書の出版前に自死された)ことに精神科医療の無力を強く感じさせられた。そして、著者が悔しさを込めて綴った身体拘束の体験——徹底的にモノ化された「自分の一部が死んでしまった」と感じた体験——をはじ

め、当事者側が生きている精神科医療の実態を、われわれ医療者は皆知っておくべきだと痛感した。

2回目に読んだときは、著者が家庭環境を振り返ってさまたげに思いを巡らす様子が印象に残った。本書のユニークさ、上述の俯瞰的な視点が表れているのは、「誰がどう悪かったのか」「私が苦しんできたものの正体は一体何だったのか」理解したいともかく著者が、心理的虐待をしていた母、同じ境遇にあった兄それぞれと苛烈だった家庭状況について対話し、その原因だった父、著者にとって「モンスター」「ブラックボックス」である父ともメールで交流している点である。家族との真摯な対話のなかで、著者は、実は母が自分に愛情をもっていたことを知って涙し、一方で母の語る父像を刷り込まれていたことに気づいて困惑する。また、同じ状況を生きていたはずの兄が自分とは異なる両親像をもっていることに愕然とする。家族であってもそれぞれに異なる物語があるという事実混乱し、「私の病気は病気でなく、被害妄想によって自分で作り出した仮病なのか」と考えるほど打ちのめされてしまう。その果ての自死なのだろうかと思うと、著者の「点線の境界線」も作れないほどの強い家族への思いに胸が苦しくなった。

著者は自身の状態を「ひび割れた湯船」だという。「多くの人の湯船には、注がれたお湯が溜まっていて、その温かさと心地良さが無意識のうちに糧となって日々生きていける。ところが私の湯船はボロボロで、あちこちがひび割れている。いくらお湯が注がれても溜まっていかない。だから渴いている。湯船はたぶん、子ども時代に大人から無償の愛情をたっぷり与えられることで、ひび割れることなく綺麗に完成する。(…)大人になってからでは湯船のひび割れを修理することなどできないと思っている。」(p.69~70) 自傷行為や自殺企図で入院を繰り返す患者さんたちに出会うと、若い生命が傷ついたり失われたりすることは心底もったいないと思いながら、苦しんでいる彼女/彼にはどんな言葉もはじき返されるような気がして黙ってしまう。ひび割れた湯船の修理はできないかもしれない、でも、少しでも温かなお湯が漏れ出ないように、そのひびにそっと当てられる手の1つになれば、と願う。

(田口寿子)